

## アジアにおける豚の飼養形態 —遊牧, 移牧, 日帰り放牧—

池谷和信 (国立民族学博物館・人類文明誌研究部)

Ikeya, K. (2019). Pig husbandry in Asia: nomadism, transhumance, day grazing

All about SWINE 54, 3-7

### 1. はじめに

バングラデシュのベンガルデルタには、豚の群れとともに生きる人々がいる (Ikeya *et al.* 2010, 池谷 2014, 2015)。彼らは、200 頭余りの豚をひきつれて、自然の餌を求めて移動していく (写真 1 参照)。その豚は、アジアで最も古い形の残る豚 (「イノシシ型」) であるという。特定の放牧地があるわけではない。収穫後の畑、水田の畦、道路沿いの未利用地など、農民からみたら「雑草」が豚の餌になる (Ikeya and Faruque 2013)。彼らは、ベンガル系イスラーム教徒が大部分を占める街の中 (写真 2)、大きな橋の下の河原、ときにはゴミ捨て場などデルタの隅々まで歩き続けている。

その一方で、バングラデシュに隣接するインドにおいて豚の放牧が存在しているのか否かは知られていない。そこで本稿では、インドにおける豚の飼育形態の現状を現地調査によって把握することを通して、南アジアやアジアのなかでの豚飼養の形の違いとその要因を追求することが目的である。具体的には、インド北東部のアッサム地方において筆者によって新たに観察されたブタの群れを対象にした放牧の事例を紹介する。あわせて、インド (アッサム州、オリッサ州) とバングラデシュの放牧を比較することから、地域による相違点とその要因について考察する。

調査地は、ブラマプトラ川 (バングラデシュ



写真1 イノシシに似た形の豚 (「イノシシ型」) と牧夫  
(出所: 池谷撮影)



写真2 街なかを通る豚の群れ (出所: 池谷撮影)

ではジャムナ川と呼ばれる)の下流と中流に対応するバングラデシュのベンガルデルタとインドのアッサム地方である(図1)。初期的調査は、2014年12月および2015年3月にアッサム地方を広く車でまわり豚の移動放牧集団を探す試みをした。一方で、豚飼養農家の放牧中に観察した群れを対象とし、主に牧夫の管理行動についての特徴を直接観察して映像記録をとった。

ここでは、飼養形態に関する用語の整理をしておこう。図2を参照してほしい(Ikeya ed.



図1 調査地(インド北東部・アッサムとバングラデシュ)

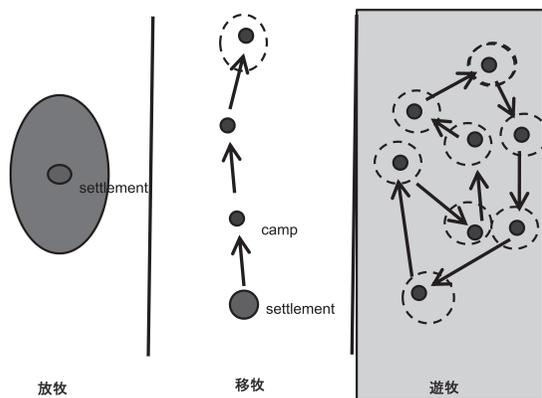


図2 飼養形態のモデル-放牧・移牧・遊牧-(池谷作成)

2017)。「遊牧」(Nomadism)とは、本拠地がなく1年中にわたり家畜とともに絶えず移動している飼育形態を示す。「移牧」(Transhumance)とは、本拠地を持ち家畜とともに年中移動している形を示す。これは、半定住とも呼ばれる。さらに、定住地からの「日帰り放牧」(Day grazing)の存在が知られている。

## 2. 結果：アッサム地方における豚の日帰り放牧

インドのアッサム地方全体からみると、ブタの日帰り放牧は一般的な飼育形態ではない。また、現時点では遊牧や移牧の形を見出すことはできていない。農村に暮らす住民の多くは、副業として少数(およそ2~3頭)のブタを屋敷の周辺で飼育している。これは、「放し飼い」と呼ばれる形である。この場合の特徴としては、個々の豚が群れを形成することはなく単独で行動している点を挙げることができる。

その一方で、以下のような豚の放牧の実際を3地点において把握することができた。【事例1】は、牧夫が付随することなく6頭の豚が自由に放牧されている形である(写真3)。筆者は、この群れを紅茶のプランテーションのなかで見つけて



写真3 牧夫の付随しない豚の放牧【事例1】

追跡調査を試みた。個々の豚は、餌を求めて農園の外へ自由に移動していったが、お互いを気にしているようで特定の豚が次の場所に移動するとその個体から離れることなく移動していた。この行動は、豚の「放し飼い」とは異なっている。筆者は、自由に移動する群れの餌やこの群れがもどる定住村が存在するの否かを同定することはできなかったが、筆者が群れに近づいても逃げることはなかった点から定住村にもどる可能性がある。

【事例2】は、1人の牧夫の管理のもとに25頭から構成される群れの豚が日帰りで放牧されている形である（写真4）。収穫後の水田が放牧地として利用されていた。この場合には、雨期と乾期に応じて放牧地が異なっていることがわかる。個々の豚は土壌を掘り下げて、地中内の根の部分を探餌していた。この草は、農民からみれば雑草と評価されているものである。牧夫は、1本の杖を持っているが、豚が餌を食べている最中には何もしていない。おそらく次の放牧地へ向かう際には、牧夫の管理行動が必要とされるであろう。

【事例3】は、幹線道路沿いにおける豚の放牧である（写真5）。当時（2012年前後）、若生氏の撮影した映像をみると、多数の豚が水の残った土地のなかで放牧されていたことがわかる。その頭数は、100頭以上になる大きな群れである。この場合には、3～4人の牧夫が付随をしていた。この土地が水田であるの否かは区別できないが、水の中に顔をつっこんで豚は餌を探していた。今後、水位が高くなると豚の放牧地としては適さなくなるであろう。また、2014年12月に筆者が同じ場所を訪れたが、豚の放牧を見出すことはできなかった。

以上のように3つの事例から、牧夫の有無や人



写真4 牧夫の付随する豚の放牧【事例2】  
（出所：池谷撮影）



写真5 牧夫の付随する豚の放牧【事例3】  
（出所：若生撮影）

数の違いは認められるものの群れをつくる在来豚（「イノシシ型」）の放牧がみられる点では共通している。また、群れの大きさ（豚の頭数）に応じて牧夫の人数が決まっている傾向を読み取ることができる。数頭の豚では牧夫は0人、20頭を超えると1人、100頭を超えると複数人になっている。さらに、今回は詳細を把握できなかったが、豚の所有者は事例2の場合には、ベンガル系のヒンドゥー教徒であったことを明記しておく。おそらく他の2事例においても非イスラーム教徒であ

ると推察される。

### 3. 考察：遊牧，移牧，放牧，放し飼い，舎飼い が生まれる要因？

#### 1) 南アジアにおける豚の放牧

これまでの研究では、アジア地域のなかでの豚の放牧の分布域は明らかにされていない。筆者らは、冒頭で言及したようにバングラデシュのベンガルデルタにおいて在来豚の遊牧の実態を世界的にみて初めて明らかにしている (Ikeya *et al.* 2010, Ikeya 2014 ほか)。そこでは、1000 頭近いブタの所有者の場合には、年齢に応じて豚の放牧集団を分け効率的な経営を行っていた (Ikeya 2014)。100 頭近いブタの群れのサイズの場には、3～4人の牧夫が付随することが多かった。また、豚の飼育者は自らの土地を所有しておらず収穫後の耕作地を放牧地として利用していた。さらに、

豚の餌として最も重要なのが野生のタロの根茎部であることが明らかにされている (Ikeya 2014)。

一方で、本稿で示したインド・アッサム地方における豚の放牧の事例では、【事例2】で示したように定住集落から日帰りで放牧に出かけている点が特徴である。現時点では、ここではバングラデシュのベンガルデルタの事例のように、1年中にわたり移動し続ける遊牧形態をアッサムでは見出すことはできない。また、インド東部のオリッサ州では、海岸部近くで豚の放牧は行われていて、豚の群れとともに家族で移動する形が存在するといわれる。これは、冒頭で言及した移牧の形である。

このように本稿では、南アジアのなかでバングラデシュ・ベンガルデルタおよびインド北東部や東部に焦点を当てたものではあるが、在来豚の飼育形態には、遊牧，移牧，日帰り放牧の3類型が

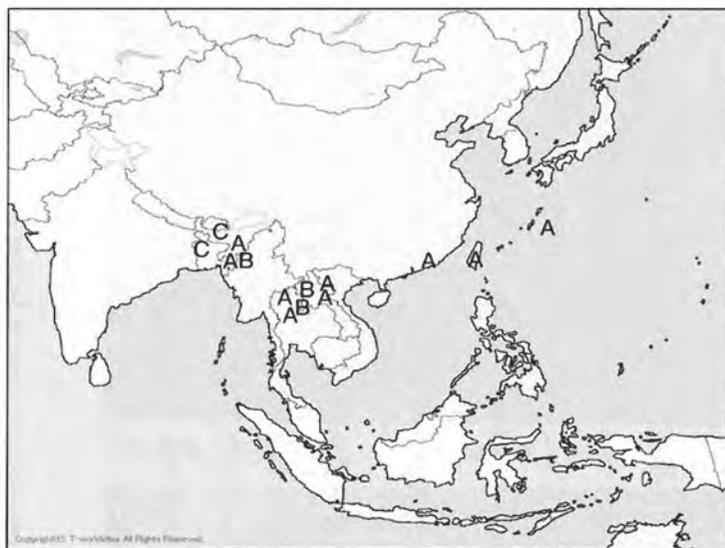


図3 モンスーンアジアのブタ飼養形態の地域性  
池谷 (2015) を部分修正  
A：舎飼い B：放し飼い C：放牧・移牧・遊牧

同時代に共存していることを指摘できる。

## 2) アジアにおける多様な豚飼養形態

図3は、モンスーンアジアにおける豚飼養形態を示す地図である。これまで述べてきた遊牧, 移牧, 放牧のほかに、既存の文献や筆者の現地調査によって「放し飼い」や「舎飼い」の形が認められる。この図から東南アジア・大陸部の山間地域を中心にして放し飼いがみられる。また、舎飼いは、多数の先行研究にみられるように近代の養豚においては最も広くみられる飼育形態である。さらに、遊牧, 移牧, 日帰り放牧の形は、本稿で言及してきたように南アジア地域において特に発達したものである。

それでは、どうして「日帰り放牧」と「舎飼い」という2つの飼養の形がアジアのなかで共存しているのであろうか。この問題を解くには、世界的な視野から豚飼育の起源にまでさかのぼりその歴史的な形成過程の違いを考慮しなくてはならないであろう(池谷2014)。つまり、数千年前に豚は西アジアと東アジア(中国)においてそれぞれ野生のイノシスを家畜化して生まれたとされるが、当初から飼育形態に違い(西は放牧, 東は舎飼い)があったと推察される。一方で、本稿が焦点を当てた南アジアにおいて豚の家畜化が進行していたのか、あるいは西アジアからの豚の伝播によって導入されたのかは明らかではない。南アジアにおける「イノシシ型」の豚の形成過程については、未知なる課題として残されている。アジアのなかでの西アジア, 南アジア, 東アジアにおけるイノ

シシから豚への移行過程を想定しながら現在の豚飼養の地域性が生まれた要因を明らかにすることを、今後の課題としたい。

## 参考文献

- Ikeya K., K. Kurosawa, M. Khan, S. Husain, M. Faruque, T. Amano 2010 A preliminary ethnological report about native pigs and humans in Bangladesh. *Rep. Soc. Res. Native Livestock* 25: 105-109.
- Ikeya K. and M. O. Faruque 2013 Food of Nomadic Pigs in the Bengal delta of Bangladesh. *Rep. Soc. Res. Native Livestock* 26: 99-103.
- Ikeya K. 2014 Biodiversity, Native Domestic Animals, and Livelihood in Monsoon Asia: Pig Pastoralism in the Bengal Delta of Bangladesh. K. Okamoto and Y. Ishikawa (eds.), *Traditional Wisdom and Modern Knowledge for the Earth's Future*, 51-77, Springer.
- 池谷和信 2014 「世界の家畜飼養の起源—ブタ遊牧からの視点—」池内了編『「はじまり」を探る』105-126頁, 東京: 東京大学出版会
- 池谷和信 2015 「人類による動物利用の諸相——モンスーン・アジアのブタ・人関係の事例」松井章編『食の文化フォーラム33 野生から家畜へ』88-111頁, 東京: ドメス出版
- Ikeya K. (ed.) 2017 *Sedentarization among Nomadic Peoples in Asia and Africa*, Senri Ethnological Studies 95, National Museum of Ethnology.